

水納島のこゝと

ライター 橋本倫史
はしもと ともふみ



©kawachiaya

沖縄本島北部に、本部という町がある。美ら海水族館があるから、訪れたことがある人も少なくないだろう。美ら海水族館から海を眺めると、伊江島が見える。かつて航海の目印にもなったという城山が、人目を引く。じっくり眺めていると、伊江島の左側に平べったい島があることに気付く。「クロワッサン・アイランド」の愛称で親しまれる水納島だ。

真っ白な砂浜と、エメラルドグリーン的大海。僅か0・4kmほどの広さしかなく、ゆうに歩いて一周できる。絵に描いたような南の島は、各種マリンスポーツが楽しめるうえに、沖縄本島から定期船で僅か15分というアクセスの良さも手伝って、7万人近い観光客が訪れる人気のスポットだった。

僕が初めて水納島を訪れたのは、2015年のこと。海に潜るわけでもなければ泳ぐわけでもないのに、毎年のように足を運んできた。そして2022年の2月に、『水納島再訪』という本を出版する運びとなった。

きっかけは、いつもお世話になっている民宿の主人・祥さんがふいに口にした言葉だ。

水納島には、水納小中学校がある。この学校が2019年から休校になり、島に暮らしていた教員がいなくなった。また、かつて定期船は水納島を母港としていたものの、水納島に暮らしながら船員になってもいいという人員が集まらず、2018年からは沖縄本島が母港になった。

「島に暮らす人の数が減って、大変ですよ」久しぶりに会った祥さんはそうこぼした。人の数が減って大変なのは、どんなことだろう。道掃除や草刈りなど、人手が必要になる作業だろうか。或いは、伝統行事を維持するのが大変なのだろうか。「具体的に、どんなところが大変なんですか？」と呑気に尋ねた僕に、少し間を置き、「どんなところがっていうより——このままいけば無人島になる」と祥さんは言った。

島には商店もなければ、病院もない。観光客の増える夏場には教軒のパラーが営業しているけれど、それも昼間だけ。郵便物は、島の班長が各戸に配達する。もしも火事が起きると、島民自ら消火作業に当たらなければならない。ゴミも定期船で沖縄本島に運び出すのだが、北風の吹きつける時期や台風シーズンには欠航が多くなる。離島の暮らしには不便なところが多く、若い世代が島を離れるようになって

て、高齢化が進みつつある。休校中の小中学校が廃校になってしまえば、子育て世代が住み着くのは難しくなる。だから祥さんは「このままいけば無人島になる」と口にしたのだ。

水納島に学校ができたのは、1937年のこと。最初は隣にある瀬底島の分校として設置され、1957年になってようやく水納小中学校として独立する。戦後にへき地教育の振興が進められる流れの中で、教育に必要な設備が少しずつ整えられ、島のインフラも整備されてゆく。

へき地教育の振興は、多分に中央集権的だった戦前の教育制度に対する反省から生まれたものだ。それは、憲法25条に定められた「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という文言とも呼応する。どんな土地に生まれ育ったとしても、その土地で等しく教育を受け、文化を享受し、生きていくことができる。それが戦後間もない日本に掲げられた理念だった。この輝かしい理念は、今の日本にも息づいていると言えるだろうか？

このままいけば無人島になるリスクを抱えているのは、水納島に限ったことではない。沖縄の離島の多くは、多かれ少なかれ、近しい問題を抱えている。沖縄に限らず、各地に「限界集落」と呼ばれる地域があり、日本の人口は減り続けている。水納島の今後、日本の未来を重ねてしまふ。



『水納島再訪』
四六判 242ページ好評発売中
講談社ウェブサイト
<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000361954>

略歴
1982年広島県東広島市生まれ。著書に『ドライブイン探訪』（筑摩書房）、「市場界限 那覇市第一牧志公設市場界限の人々」『東京の古本屋』（本の雑誌社）。JTA日本トランスオーシャン航空の機内誌「Coraway」で「家族の店」を連載中。2020年から2021年まで読売新聞読書委員を務める。